

# 經濟論叢

第七十五卷 第四號

---

經濟學をいかに學ぶか

現代の經濟學と古典……………青山秀夫……（2）

經濟學の歴史的研究の意義……………出口勇藏……（9）

經濟法則の認識について……………吉村達次……（25）

會計學的觀點と會計學的思考……………酒井文雄……（35）

一八三〇年イギリス下院の階級構成……………佐藤明……（55）

ドイツ帝國主義と「結集政策」……………大野英二……（74）

ドイツ共和民主國における經濟發展……………金鍾碩……（93）

公有林野統一に現れた絶對主義的經濟政策の特質  
……………鶴嶋雪嶺……（114）

ロック・ウッド著 日本經濟の發展（1868—1938）  
……………堀江保藏……（130）

---

〔昭和三十年四月〕

京都大學經濟學會

ロックウッド著

日本經濟の發展（一八六八—一九三八）

——成長と構造變化——

Lockwood, William W.; The Economic Development of Japan.  
Growth and Structural Change 1868—1938.

堀江保藏

一、本書の内容

著者はプリンストン大學の Woodrow Wilson School of Public and International Affairs の assistant director.

本書は、その副題が示すように、明治維新から第二次世界大戦前夜に至るまでの日本經濟の成長と構造變化を、ロストウ流の理論と方法を以て説明しようとしたもので、全篇十章から成る。

\* W. W. Rostow: "The Process of Economic Growth"

第二章「近代産業組織の建設——明治時代」、第三章「日本經濟の變遷」において、近代日本になじみの浅い讀者のために、

歴史的な出來事を綴つて、この時期の經濟發展を概観した著者は、第三章「經濟成長の規模」において、日本經濟が近代化した事實を、資源産業、工業、サービス産業、國民所得、消費水準などあらゆる面にわたつて、統計的に實證する。その要點は、『西洋的な附屬物を持つた農民の工業社會であつた日本は、そこから脱して、今や農民の工業制度と封建的形式の殘滓を持つ近代の産業社會として出現しつつあつた』（七九頁）というにあり、しかも、その近代化は、成熟度と生産力において歐米諸國には及ばないにしても、アジアの隣接諸國とは比較を絶するものあり、要するに日本は中點（midpoint）に立つていたと

している。本書の主眼の全貌は、應、本章で與えられているが、著者はこれだけでは満足しない。著者曰く『歴史家の仕事は、第一・二章で述べたような出来事の物語の下を探索し、および第三章で述べたような統計的證左を越えてそこに働いている諸力を發見するにある』(二五一頁)と。かくて著者は第四章「技術」において、人口の増加、生産技術の變化、市場の擴大、産業の新組織など、廣い意味での技術的變化との關係において、生産力の長期的發展を考察する。第五章「資本」は、資本蓄積の進行と經濟的進歩との關係を、實質資本の成長、貯蓄と資本、投資と經濟的進歩の三項目に分つて述べているが、ここにおいても、著者は、單に數量的な外形的な敘述に終ることなく、貧乏な日本國民をして速かに資本蓄積を行わしめた政治的、社會的、思想的諸要因にまで掘り下げて検討している。

第六章、第七章「外國貿易と經濟生長」。(一・二)においては、日本經濟の動態的發展において外國貿易が占めた地位ないし意義が取上げられている。そこにおいて注目すべきは、著者が『外國市場への進出が日本の近代工業化の原動力であつたという考え方は文學的發明以外の何物でもない』(三〇九頁)といい、また『日本が工業化において成功したのは後れたアジアの眞中にあつたからではない』(三一九頁)と述べている點である。すなわち著者によれば、なるほど輸出市場としての極東の重要性は否定せられないが、日本經濟の成長過程においてより

重要なものは、歐米諸國との貿易であつた。同時に著者は、右の成長過程において演じた國內市場の役割を、外國貿易に劣らず重要視しているのであつて、本書の構成上、第六・七章に至つて始めて外國貿易を取上げた所以はここにある。

第八章「構造變化——需要の新方向」では、國內および國際需要の構造の變化に見られるところの、日本經濟の工業中心化傾向と、そこに作用した諸力とを検討し、第九章「構造變化——資源の利用」においては、雇傭、國民生産および國民所得の構造變化を考究している。いわゆる構造變化とは、日本經濟の重心が第一次産業から近代工業およびサービス産業に移り、これによつて經濟の全體が均整のとれた多角的な性質を持つに至つたことを指すのである。

最後の第十章「國家と經濟企業」においては、主として經濟成長における國家の役割が論ぜられている。何故この問題が最後の章で取上げられているかは、著者が『産業革命は生産技術の變化と同じく社會的、政治的整備を要求する』(四九九頁)と述べていることによつて明らかであろう。かくて著者は、明治維新以後の政府および政治的指導者の重商主義的、官僚的性質とその經濟發展における役割を論じ、ついで經濟政策が私企業的發展を培い促進した事實を述べ、結局、日本の速かな經濟的成長に與つて力があつたのは、官民の協力態勢であつたことを強調している。

## 二、本書の特徵

本書を通讀して私が特徴的だと感じた二三の點を列擧しよう

第一は、統計資料が驅使されていることである。かつて私は、著者から日本の統計數字の信頼性について質問を受けて、返答に窮したことがある。それは、統計數字に一定の客觀的な基準がなく、あつても連續性に乏しく、從つて利用しようとする場合にしばしば困難と不安に出逢うからである。かくてただ、全般的な傾向を知るのには役立つであらうと答えて置いたのであつた。ところが著者は、上述のような困難と不安にも拘らず、統計的資料の殆んど得られない他のアジア諸國に比べるならば、日本の研究ははるかに困難が少ないといひ、(第三章)日本の學者でもあまり好まない數量的な研究を立派に成就したのである。この事に對し我々は深き敬意を表しなければならぬ。

第二、しかし前にも述べたように、著者は統計的證據の敘述だけでは満足せず、それを越えて經濟的成長をもたらしした諸力に検討を加え、政治機構、社會構造、政治的、經濟的指導者の物の考え方、日本人の生活慣習にまで立入っている。この意味において、ロストウの成長理論および方法は、著者の日本研究において十分に生かされているといふべきであらう。

ロストウの研究方法は要するに、經濟成長の研究に當つて、あらゆる經濟的要因ばかりでなく、可能な限り、政治的・社會

的要因をも取上げ、すべての要因相互の作用連關のうちに經濟成長を見ようとするものである。この方法論に立つて、著者は、『維新以後の經濟發展は主として外國貿易と工場制工業の範圍に限られ、その恩恵は大部分帝國主義戰爭と財閥の利益とへ吸取られ、それ以外には殆んど實質を持たなかつた』とする通説に挑戦しているが、(序文)、この點は我々日本の學者も十分に反省と再検討を加うべきところだと思ふ。

第三に、本書の重要な特色の一つは、日本の經濟發展を後進國の經濟發展の一つの型として取上げ、特にアジアの後進國はその經濟開發に當つて日本の經驗を生かすべきであることを示唆している點にある。第二次大戰以後、米國における日本研究には、この種の意圖を含めたものが頗る多いが、本書はその最も成功的なものの一つに數えられよう。同時に我々日本人も、眞にアジア諸國との協力提携を欲するならば、かつての日本資本主義の發展過程におけるアジア諸國との關係について、單に帝國主義、軍國主義に限ることなく、もう少し幅の廣い見方をなすべきではなからうか。

以上の外にも言及すべき多くの點があり、批評すべき點も多くあるが、近代日本經濟に關心を持つものは、理論家たると歴史家たると、はた政策學者たるとを問わず、一讀して悔を残さぬ書物であることは、斷言して憚らない。(四三表、三圖表、索引とも六〇三頁、一〇ドル、プリンストン大學版、一九五四年十二月發行)